

# テレビのこれから

## —デジタル化時代を迎えて—

(社)日本民間放送連盟 会長  
(株)フジテレビジョン 会長



ひえだ ひさし  
日枝 久

### 情報共有化の時代から情報選択の時代へ

「テレビのこれから—デジタル化時代を迎えて—」という本日のテーマの結論を先に言ってしまうと、私は情報の共有化から情報の選択の時代に入るのはないかと思っており、それがデジタル化時代のテレビ、あるいは情報の一つの形になると考えます。これまでテレビというのは、飽くまでも見て楽しむものであり、情報を受け取るものでしたが、今後はそれだけではなく、「使えるテレビ」にも変身していきます。テレビのデジタル化は、いろいろな部分で享受できる新たなサービスを生み出してくると思っています。

### アナログからデジタルへの目を見張る変化

テレビのアナログからデジタルへの様々な変化が始まる前は、評論家の皆さんなども、「デジタル化などとてもできないだろう」という話を随分されてきました。私はまさにデジタル化の旗振り役でしたから、いろいろと言われることもございましたが、官民挙げてのお力の結果、アナログからの転換は予想以上にうまくいきました。2003年12月1日に東・名・阪でデジタル化が始まり、視聴エリアもどんどん広がっておりまして、何らトラブルが起こることもなく、順調に進んでおります。

日本の景気は、現在、踊り場にあるようですが、来年(2005年)は着実な成長を必ず遂げるだろうといわれております。IT産業も今はやや生産の調整期に入っているようで

す。しかし、自動車などはもちろんですが、IT関連も、液晶・プラズマテレビの普及とともに日本の景気を引っ張っていくことは間違いないことでありまして、年末のクリスマス商戦あたりを契機に、再び景気が上向いてくるだろうと予想されます。

その勢いを借りまして、東・名・阪以外の、2006年までにデジタル放送を始めることとされている地域でも、デジタル化前倒しの動きが出ており、既に富山・岐阜・神奈川・茨城等では始められております。これは数年前までは想像もできなかったことです。これから2006年組が順次スタートしていくわけですが、今の状況から判断すると、順調に進んでいくと思われます。私どもが官民一体となつてつくりました第5次のロードマップでは、2011年7月までに4,800万世帯、1億台のデジタルテレビを普及させ、それも情報格差がないように、日本全国でアナログからデジタルに移行していくというのが、今のデジタル化の大きな流れであります。私ども放送事業者も、ITの文化の究極となるデジタルテレビの発展へ努力していくつもりであります。

### 放送通信技術の発展の道のり

さて、放送通信技術の発展に私がどうかかり合ってきたかと申しますと、私は1961年、開局の1年後にフジテレビに入社いたしました。最初に放送記者として仕事を始めたころ、ニュースの画面はテロップだけで、その裏でアナウンサーが原稿を読んでいた。現場の映像はほとんどなく、せいぜいニュース映画館で上映しているようなフィルム映像や写真のみで、生中継などはなかった時代でありました。

それが一転したのは入社して数年後の1963年、あのケネディ大統領暗殺事件でした。この時、日米間で初の宇宙衛星からの実験放送が行われました。リレー衛星を使っているから、アメリカから送られてくる映像が日本で見られるのは1回当たり20分か30分ほどで、次の映像は3時間後に衛星が回って来て、また送られてくるという状況でした。初めての映像は延々と沙漠の風景が続くだけでしたが、まさにその実験の最中に、通信社からケネディ暗殺の第一報が入ってきたのです。くしくも通信衛星の実験放送の初日に、我々はその劇的なシーンに立ち会ったわけです。3時間後、現地の映像が送られてくるとともに、「日本の皆さん、この輝かしい実験の日に悲しいニュースをお知らせしなければならないのは誠に残念なことです」というのが第一声でありま

した。

それからの衛星・放送技術の発展は御存じのとおりで、今年(2004年)のアテネオリンピックでは、アテネから全世界に向けて衛星生中継でオリンピックの様子が送られ、世界中で39億人がこの映像を見たといわれます。ケネディ暗殺の映像からアテネオリンピックの映像までの技術進歩というのは、大変なものがあります。1964年の東京オリンピックでは、初の衛星生中継で全世界にカラー映像が送られましたし、1965年には、アポロ宇宙計画での月面着陸の様をお茶の間のテレビで見ることができました。まさに放送通信の技術進歩なくして今日のテレビというものはあり得ないということです。

### 科学技術の発展によって栄えてきた産業

1950年代、メディア論では、有名なマクルーハンとラッセル・ニューマンという学者が、私にとって「テレビの聖書」とも言うべき言葉で自説を活発に展開していました。マクルーハンは「メディアはメッセージである」と言ってテレビの将来を予告し、ラッセル・ニューマンは「テレビは勞せずして情報をすべて自分の中に取り入れることができるものだから、将来必ず伸びるだろう」と言いました。

我々のビジネス、産業は、技術の進歩を無視していたら必ず衰退していくと思います。数年前までは、「デジタル化反対」が声高に語られていました。しかし、歴史を振り返ると、18世紀から19世紀にかけて石炭が使われ始めることで人力から蒸気機関車になり、産業革命が起り、工業化社会に突入しました。あの時、もし石炭を放棄して人力のままで続けていたら、多くの産業は消えていったのではないのでしょうか。19世紀から20世紀にかけては石油が発見され、時間と距離が短縮され、大量生産・大量消費という時代になりました。そして20世紀の中ごろになって欧米、そして日本でテレビが開始され、昨年(2003年)、我が国でもテレビ開局50周年というところまで来たわけです。デジタル化の旗振りをしてきた私としては、科学技術の進歩なくしてテレビ

や通信産業の発展はあり得なかったと思うのです。

### デジタル化時代で放送事業者が目指すもの

こうした放送通信技術の進歩で我々のビジネスが発展し、アテネオリンピックの際には情報の共有化が世界39億人という規模で行われたわけですが、これからはデジタル化によって、テレビも双方向機能や携帯受信がどこでも利用できるユビキタス社会が実現し、個人々が情報を選択していく時代になるだろうと思われまます。21世紀はきっと、自らか選択する情報化社会が花開くだろうと思うのです。

既に私どもの会社でもデジタル化に対応した社屋を造っております。また、通信衛星を使ったSNGを全国に配置しており、今まで地上の通信設備で送っていたニュース映像をどこからでも送れるようになり、また、系列局には専用回線で一斉に配信することもできます。ニュースは非常に迅速に、世界中から生中継で放送できるようになっています。

さらに、これからのテレビはデジタルの3波共用(地上波、BS、CS)になってくることで、美しい映像で、きれいな音声で見ることが出来ます。あるいは放送と通信の融合によって双方向、携帯受信、移動体受信など、ユビキタス社会の幕開けを迎えることと思います。放送事業者がこの変革に真剣に取り組まなければ、我々の産業もまた、衰退していくだろうと思われまます。

釈迦に説法であります。世界は石炭の利用から産業革命が起り、石油の利用へと変革してまいりました。「ヘビは脱皮しないと死ぬ」と言われます。テレビは基幹メディアであります。我々は、今、利益が上がったからといって安心してはいけません。デジタル放送らしい番組を積極的に放送して視聴者の目をテレビの画面にき付けにし、放送と通信の融合によって新しいサービスを創出し、豊かな情報化社会をつくっていくことこそが、我々テレビの世界の人間に課せられた仕事ではないかと思っております。

(2004年12月15日 第33回ITUクラブ定期総会での講演より)